

山と博物館

第4巻

第10号

1959年10月25日

大町山岳博物館



サルソンとフィリスティン

フレミング・ジョバンニ(イタリヤ)作
16と17世紀のヨーロッパ大陸の
Mannerism 様式の代表作の1つ。
ウィクトリア・アルバート博物館所蔵

ヨーロッパの博物館

鶴田 総一郎

何もかも最新ずくめといったニューヨークからロンドン北飛行場に降りたつた時には、予想はしていたもののその古めかしさに先ず一驚を喫した。そして後3週間。英国の国民性というか、古い革袋に新しい酒を盛る式の、悪くいえば玉名混淆の博物館の実態をまざまざと見せつけられて来た。特に、その百年でも待とうという辛抱強さには全く恐れ入ってしまった。第一に英国博物館協会で、創立は1800年末というから恐らく世界でも最古の協会の一つであろう。これが今でも4軒長屋(といつても四階建)の地下室と一階を間借りして全然貧乏くさい。職員も専任の男子は書記長のナイチンゲール氏だけ。後は女子でこれが汚ないエプロン(前掛といつた方がびつたりするようなやぼつたいもの)に両手を膝写板のインキでうす黒くして一枚一枚ずつている姿は、これがあのがつちりした組織を持つ協会の事務所かと足が急に重くなつたくらいである。ところが、実際の仕事は、例の学芸員の検定試験とその資格の附写、技術員の検定とその証明書の発行—これが英国での博物館への就職と、昇給昇格の必須条件になっている。——とこれに必要な講習会を長年に亘つて水も漏らさぬ完璧振りでやつているのである。しかもカーネギー財団からの寄附があつたからとはいえ、上述の研修費は協会から会員の博物館へ補助金として出しているという充実振りである。なお国内外の研修費も年10名ぐらい出しているという具合で、この方面ではあの金持国の米蘭博物館協会など足下にも及ばない。つまり世界の最前線を悠々と独走しているのである。学芸員用の図書も十数冊を既に発行し、博物館一覧、博物館用参考文献図書一覧など次々に必要な書物もつくつていくところあたり、議論の独走する日本とは正に反対—というよりすべて実際に役立つところまで辛抱強く頭張り抜いている姿には正直なところ文句なしに頭が下る。

英国といえばブリティッシュ博物館が何といつても第一にあげられるが、これまた古色蒼然、例のロンドンの霧と煤煙の中に薄黒くかすんで建つているところなど、この中に世界の秘宝や文化の発祥に関する第一級の証拠品が目白押しに収蔵されているなどとは到底思えない。ところが一歩足を踏み入れると、エジプト—ギリシャ—ローマの各時代に亘つての国宝というより世界宝がこどもなげにさらりと展示してある。これを米国の、たとえばボストンの美術

館などに較べて見ると、後者がいわば残り物を後生大事に集めて、仰々しく宝物扱いにしているのに対して、溜飲の下る思いである。しかし戦火の生々しさは未だ消えやらず、同じブリティッシュ博物館の自然物関係の方では—サウスケンシントンにあり場所も建物も別—2階の植物部は未だ復旧ならず閉鎖したまゝである。戦火といえれば現在ブリティッシュ博物館の倉庫は全部、防空壕だつたとかで、地下3階の物置がつつちりしたもの、もちろん一通りの温湿度調節装置の他に防塵装置が特に工夫されてついている。地下倉庫を2時間ほど引きまわされてへとへとになつたことも羨しさとともに、今でも思い出になつている。ところでこのブリティッシュ博物館は何と国会直結で格は各省並みであり、運営委員会は王室代表と国会代表でできており、予算や人事は直接国会で決めるといつた破格—日本から見れば—の高い位置であり、年間数十億の経営費を悠々と使つていることも成程と思える。しかし文部省直営のものもないことはない。ビクトリヤ・アルバート博物館と科学博物館がそれである。この二つはさすがに教育活動については熱心であり、展示についても、米国のそれにくらべて決して劣らない。例えば写真の青銅像はビクトリヤ・アルバート館の一つのホールのそれであるが、ゆつたりと十分な空間の中に、見事な照明によつて影と本物の対比からイメージを躍動させている。教育活動といえ、これに最も縁の遠いのが大学付属博物館なのが常識であるし、伝統をはこる英国の特にケンブリッジと並んでその偉業を天下に轟かせているオックスフォードなどその尤なるものかと思つたら、とんでもない間違いだつたのに、これまた驚いた。アッシュモレア美術館で美術系統の学生が美術館の像を写生している。このように古くて新しく、新しく古い。わかつたかわからないのか、わからないような言葉がつまり英国の博物館の実態である。そしてその底に挺でもくちげない、執拗な程の耐久力と実行力が地球の中心までつながつているかと思うほどがつちり生きている。(国立自然教育園次長)

(1) イギリスの博物館



美術館で写生する学生

立山・剣岳の開山

広 瀬 誠

日本アルプスがちらりと現われる最初の文献は日本書紀である。日本武尊、(やまとたけるのみこと)が東国を討伐されての帰途、碓日峠(うすいとうげ)に立つて亡き妻弟橘姫(おとたちばなひめ)を偲び「あづまはヤノ」と歎かれたというのは有名な話だが、ここで隊をわかち、吉備武彦(きびのたけひこ)の軍勢を越ノ国に遣わされ、尊は信濃に入り、けわしい山々谷々を越えて美濃に入り、ここで吉備武彦と落ち合われたという。武彦は越後・越中をまわり飛騨を縦断して美濃に出たのであろう。もちろん日本書紀の記事には問題が多く、これをそのまま史実とすることは許されないが、大和朝廷の日本統一事業が信濃・越後・越中・飛騨・美濃つまり日本アルプスをめぐる国々に及んだ事実を伝えているものと見ればいい。『この国は山高く谷幽(ふか)くして翠(あお)き嶺万重(よろづえ)なり、人杖つかひても升(のぼ)り難し、峻嶮しく磴迂(さかめぐ)れり』という記述に日本アルプスの面影が宿っているのをうれしく思う。当時の大和朝廷の武人たちの逞しい胸には、玉の首飾りがゆらゆらとゆれていたであろう。飾り玉の中にはヒスイの曲玉(まがたま)がひととき美しく光っていたであろう。このヒスイこそは、姫川の支流小滝川の谷あい産するもの——いわば日本アルプスの山色のしたたりなのである。日本でヒスイを産するのはここヶ所で、これが古代の曲玉の原石となっていたことが最近考古学によつて明らかにされている。万年雪の雪どけ水が白泡を吹いて奔騰し、深く流れて深緑に凝る。その谷あいからヒスイが生れたのである。古代叙事詩とヒスイの玉と北アルプスのとりあわせは夢よりも美しい。日本アルプスに関する二番目の文献は万葉集である。天平19年(747)大伴家持(おおとものやかもち)・同池主(いけぬし)の作った立山賦と題する長短歌6首がそれである。家持は翌20年にも立山と早月川をとりあわせた短歌一首を作っている。日本書紀では漠然とした日本アルプスの面影にすぎなかつたのが、ここでは山名もはつきりとして、立山の威容が具体的に歌われている。

現在タテヤマと呼ぶが、古代にはタチヤマと呼んでいたことは、万葉集の表記によつて明らかである。壁のように切り立ち、そびえたつ山脈という意味でタチヤマと呼ばれたのであろう。伝説によると、立山の開かれたのは大宝年間(701~704)となっている。つまり万葉集の立山賦以前となっているが、これは社寺縁起類にありがちの誇張で、史家は承認しない。高橋文太郎さんはかつて、高山の信仰には二つの型があることを指摘されて、一つは御岳・白山・立山のように登拝する流儀、いま一つは白馬や笠のように登ることを忌む流儀であると説かれた。しかし古くは、どの高山も遙拝するだけで、登る



矢疵如来 左胸の矢疵に注意

ことを恐れたのだ、それが修験道の発達につれて登拝信仰に変つて来た。近代まで禁登の山だつたのは、宗教の開山の機会がなくて、いわば山岳信仰の発達から取りのこされた山であつたのだ。富士山も万葉集では「飛ぶ鳥も飛びも上らず」として、近づく者なき神聖さを歌われている。立山もこれと同じで、皇神(すめがみ)のうしはきいます山——神の座として畏敬されている。

当時の人跡未踏の立山は、どんなに原始的で、どんなに奥深かつたことだろう。——想像してみるだけで、何だか気が遠くなる。伝説によると片貝川の傍に居館を構えていた越中国守、佐伯有若(さえきありわか)が、逃げた白鷹のあとを追つて、常願寺谷から山に入り、熊に出合つてこれを射つた。熊の血のあとをつけて高い山に登つてしまった。熊と思つたのは実は阿弥陀如来で、仏の勅によつて有若は立山を開いた。この有若が慈興上人であると。(別の伝えによると有若の子有頼(ありより)ということになっている。)立山では矢疵如来(やきざによらい)といつて胸に穴のある仏像が祀られているが、それにはこうしたいわれがあるのである。佐伯有若

という人物が平安初期に実在したことは、延喜5年(905)の隋心院文書に『越中守從五位下佐伯宿弥有若』というレッキとした署名があるので、疑うことはできないが、有若またはその子有頼が立山を開いたということを証明する史料は、残念ながら全然ない。しかし慈興上人を開祖と仰ぐ佐伯一族が、立山山麓芦峠(あしくら)に住み、古くから立山を宗教的に支配して来たことは、厳然たる事実である。

万葉集の立山賦には『立山の帯ばさる片貝川』と歌われている。万葉学者たちは「立山なら常願寺川を持つて来るべきだ、片貝川は合点がいかぬ」と首をかしげている。しかし立山開山縁起に、国守有若の館が片貝川の傍にあつたと伝えられているのだから『帯ばさる片貝川』でいいのである。佐伯一族ははじめ片貝川の傍に住んで立山を遙拝していたのだ。そして遙拝信仰から登拝信仰に進むとき常願寺川へ移住した。だから片貝川は立山の神様の故郷だといわれ、立山に参詣するときには片貝川の小石を持参すると神様が喜ばれるといつて、つい最近まで小石を奉獻する風習があつたのである。芦峠には佐伯氏と志鷹(したか)氏が住んでいるが、志鷹氏は先住民で、佐伯氏が志鷹氏を征服して住みついたものだということは、史的に証明されている。白鷹のあとを追うという伝説の趣向には、志鷹氏を征服した史的記憶が反映しておりはせんか。夢物語のような開山伝説にも、あんがいシッカリした事実の骨がある。この白鷹は万葉集にもひつかりがある、大伴家持の大切にしていた鷹が逃げ、いくら探してもみつからない、歎いていると、夢に乙女が現われて、鷹はきつと近日中に戻つて来ますと慰さめてくれた。家持はこれを物語詩ふうの長大な長歌に作っている。佐伯一族の立山開山の体験が、伝承化し、神話化して行く際に、この万葉集がとり入れられたのであろう。云い換えると、万葉歌が触媒となつて開山神話が成立したのであろう。立山縁起と万葉集とがこつそり結びついているのには、わけがある。奈良朝の詔勅では大伴・佐伯と並べられ、家持自身の歌にも『大伴と佐伯の氏』と並称して歌われている。両氏は深い親近感で結ばれていたのである。おまけに家持も有若も越中国守であつた。こうした歴史的事情のもとに立山伝説は形造られて来たのである。

タチヤマが山脈総称であつたことは、ほぼ確実だが、神の座として遙拝する場合には、やはり神のいます地点——主峰というものが考えられたであろう。剣岳がそれだつたらうというのが相当有力な説で、深田久弥さんなども同じ説である。立山崇拝の発生地が片貝川であつた点から考えても、剣岳が有力であろう。剣岳は容易に登れなかつたので、雄山に社殿を築き、しまいに雄山が立山の名を独占したのであろう。やがて立山と剣岳とは信仰が分化して、立山は芦峠を根拠地とする台密系、剣岳は大岩(おおいわ)を根拠地とする東密系になつていく。大岩には岩壁を刻んだ平安時代作の不動明王の巨像があつて旧国宝である。剣岳は登攀不可能な山とされ、弘法大師がワラジ千足をついやしても登れなかつたという伝説もあるが、実際には相当古く登つた修行者があつ

たことは、頂上で発見された遺物からみても確実だ。明治40年7月人跡未踏と信ぜられた剣頂上をきわめた紫崎測量官が錫杖頭と槍穂を発見した。錫杖頭はシナ竜門洞窟仏像のものと似ているといわれ、唐時代の作が伝来したものかといわれている。錫杖製作年代がそのまま登頂年代とはいえないが、その古さから考えると平安時代にはもう登られていたと見ていい。つまり立山開山と同じ頃に登頂されたのだ。



針ノ木岳より剣岳

私は想像する。遙かに剣岳を仰ぎみて感激した一修行者が登頂を發願した。(笠岳から槍ヶ岳を望んで登頂を決意した播隆上人のように)彼は大陸渡来の秘愛の錫杖をにぎりしめて険しい岩稜をよじのぼり艱難辛苦した。いくたびか失敗したが、ひるまづついに成功した。彼は山頂でゴマを焚いて法を修め、深い感激をこめて錫杖を山頂にとどめて来た。(アルバータの頂にビッケルをとどめて来た近代登山家のように)と。

芦峠の人たちが布教に力を入れたので、立山信仰は全国に拡がったが、真言宗の剣岳の信者たちはひそかに修行を積むだけで宣伝はしなかつた。剣岳はそのまま不動明王と仰がれたが、神道風というと手力男(たちからのお)神で、刀尾(たちお)天神とも称された。信州戸隠山も手力男神を祀る霊山だが、その御正体は九頭竜(くずりゆう)で、九つの頭を戸隠の峰々に載せ、尾は越中剣岳を七捲き半まいているという伝承がある。

すると胴体は五竜岳あたりに載つてついていることにならうか。剣岳から激しい勢で流れ落ちる谷川が早月川—万葉集に「たち山の雪し来らしも延槻の川の渡り瀬あぶみつかすも」と歌われたハヒツキ川である。この谷あいから巨大な隕鉄が発見された。明治35年榎本武揚がこれに目をつけ、この鉄で刀をきたえ、流星刀と名づけて、時の皇太子嘉仁親王(後の大正天皇)に献上した。頭が八つあつて、八山八谷にまたがる八岐大蛇(やまたのおろち)の尾から天叢雲劍(あめのむらくも)が出現したという神話は有名だが、これは頭が九つあつて戸隠山から剣岳にまたがる巨竜のその尾にあたる岩から霊劍が出現したという近代の神話だ。その偶然の一致がゆかいである。竜はアギトに玉をもつているといわれる。尾に星鉄を蔵していたこの巨竜が、アギトに帯びているのはどんな玉だろう。日本アルプス北端小滝川のヒスイこそ、この竜の佩玉として最もふさわしいではないか、と私はひそかに思うのである。(富山県立図書館員)

「いいわね、山小屋で二ヶ月も生活できるなんて」私をとりまく友人は皆山の好きな者ばかり、夏の小屋番生活を羨望されながら、二ヶ月間に必要なものを最少限にまとめ、ザックにつめて、又今年も七倉の尾根をあえぎつつ登った。五貫に満たない荷物に閉口している私に、八貫も九貫も背負ってポッカを手伝ってくれた山の仲間たちは、笑いながら気合を入れてくれた。彼等の友情に気を良くした私はどうにか舟窪小屋までバテずにたどりついた「これから二ヶ月お世話になります」、雪圧により谷側へ傾いてしまった小屋に感がい深くあいざつをした。小屋は快よく私にうなずいてくれた。大風が吹けばふつとんでしまいそうな小ちやな小屋。童話の中の小人たちがすんでいそうな小屋。とつてもあわれな小屋だ。しかしこの小屋に住んで足かけ4年、何んとも形容し得ない深い深い愛着が私の心を取りこにしていたのだ。今年の夏山は7月はじめに雨が多く、8月中旬台風があつたため、あまり恵まれた山ではなかつたけれど、山を慕つて訪れる登山者は例年と変らないくらい多かつたようである。マスコミによる影響から、ブームとまでいわれている山登りではあるが、それを憂いている登山者も数多くいる、舟窪を訪れてくれる人は、人の多い山を敬遠し静かな山旅を求めて、山を味わっているといったような人が多い。

舟窪というところは 後立縦走が針ノ木で終り、裏銀が鳥帽子から始まつているので、ちようどその中間にあたるため一般の登山者には余り知られていないコースである。そんな関係からここを通る登山者はきわめて少なく、小屋え宿泊する人も少ない。もつと宣伝して客を集めなければ経営が赤字になりますよ、とお客さんによく云われるけれど、経営というものが営利のみを目的とするものであるとすれば、舟窪小屋にそれを求めることはできない。山小屋にすんで訪れる登山者



山小屋に住んで

福島寿子

を快よく迎え、一夜の憩を与えることができたなら、それで充分なのである。8月始め庭のダケカバの葉がきらきら輝やいて空は青くすんでいた。昼寝にまどろんでいた私の耳に、素晴らしいヨーデルが聞えて来た「オイ、ヤンキーが来たぞ、すげえな今のヨーデル」、S君とK君はおおはしやぎ、私はとつさに困ってしまった。英語ときてはアイアム・ソーリー位しか知らない自分が今さらのようにうらめしくなつてきた、ところが彼は小屋に入るなり「オ茶ヲクダサイ」となめらかな日本語で注文してくれた。彼はチャック・ボーデンさんというアメリカ人だつた。チャックとはエリザベスをリズと呼ぶような愛語だという、北アルプスもほとんど歩いており、鈴蘭小屋の福島氏とは親戚ですかときかれたときはささかびつくりした。もう中年であるようだがまだ独身であるとのこと、S君がお一人暮らしも大変でしょうとお世辞と

も何んともいえないようなことを聞いたら「キマカ恋人デス」と笑いながら答えてくれた。夕食は何んにしよう大変迷つたけれど、私たちが一番得意とするところのアザミの天井を作る事にした。ストーヴでジャジャーとやつているとボーデンさんがのぞきに来て「テンブラ、私ダイスキデス」といつて喜んで、針ノ木からボーデンさんと一緒だつた女の人のパーティーから山小屋でこんな豪華な食事ははじめてですとおほめの言葉をいただいた。彼は天ぶらをたくさんおかわりして食べてくれた、夜はアメリカの話を書いた。楽しい一夜だつた。次の朝、昼食にはおにぎりをやろうとしたら「ライスボール、食べラレマセン」とあつさりことわられてしまった。次のコースは鳥帽子から東沢を経て燕え行くとのこと小屋の前で写真を写し「楽シカッタデス、アリガトウ」と手を振つて発つていつた。アザミの天井はその後大変好評であつた。

私の所属している会のバースデー・パーティーが舟窪小屋で行なわれた。私は心を込めて彼等のためにアザミの天井を作つてやつた。会員と同行された食べものにはうるさ型のK先生から「グット アイデア」とほめていただき、喜しさで一杯だつた。又後日漫画家のK夫妻がサイン帖に漫画とともに天井をたたえる詩を記すに及び、というアザミの天井は舟窪名物と命名されることになつた。アザミは天ぶらにするのでエビの味がする。花は清純で可憐である。8月末アザミの花が咲いた、つばみそのまま花開くことなくして天井にされたあざみのために…

あざみよ そのうす紫の奥床しさ くさむらに
何気なく咲いていた時は美しいと思わなかつた
けれど 今 コップにさし そつと棚に飾つた
ら他を圧するように上品で美しい すんなりと
のびた茎 あざみよそのうす紫の奥床しさ。

二ヶ月の小屋番生活、楽しいこともあつた、心細いこともあつた又哀愁を感じた時もあつた、ここにその一端を記して筆をおきたい。(舟窪小屋主 大町山の会会員)

唐 沢 岳

久保田 稔

一 はじめに

現在残された未登攀ルートの一つに唐沢岳の北面がある。

我々山の会がこの唐沢岳北面の調査及び処女登攀を計画したのは本年三月下旬の総会に於いてであった。

東京方面の有力な山岳団体でもさかんにこれをねらっていたらしいが、我々は地の利を得て暇さえあれば入山し、こゝを完全に我々のホームグラウンドとしてしまった。

残雪も消え始めた六月初旬初めて入山以来十数日、延べ人員八十余名を動員し、この唐沢岳に取組んできたが、人跡未踏のこの山は依然多くの謎を持っている。その全貌を明らかにするには、あと一、二年を要すると思われるが、本年度の偵察及びアタックも一応終止符を打つたので、今までの調査を整理してみた。

二 唐沢岳の概要

唐沢岳(2632.4m)は、葛温泉の西方に聳える山で、旧大町市内からは望見する事は出来ぬが、山岳博物館のある大町公園、南方では南大町以南、北方では借馬以北で餓鬼岳の右にその頂上をわずかに望む事が出来る。

唐沢岳は、東面を滝の沢、北面、西面を高瀬川が流れ、南面は餓鬼岳から続く尾根が走っているとはいへ、東沢及びその支流である一の沢が大きく喰い込んでいるのでどちらかといえば独立峯である。

唐沢岳は、東尾根、北尾根、西尾根、南尾根の四つの大きな尾根と、高瀬川にそぐヨタ沢、カラ沢、滝の沢の支流の野口沢、東沢の支流の一の沢の四つの大きな沢をもつ。

三 唐沢岳の尾根

① 東尾根 頂上から北東に延び、その末端である七倉まで約4Kmのこの尾根は、我々が基地として多く用いた葛温泉に最も近く、時間的に最も取付き易かつたため、最も力をいれた尾根である。しかし、その末端は傾斜が急である事と、ブッシュがひどいために取付く事が出来ぬ。それにもまして高瀬川を渉る事が難しい。従つて、ヨタ沢側か、野口沢側から中間に取付かねば稜線に出られない。我々は両面からおおよそ1600mの地点に取付いている。それから上はしばらく獣道が続き比較的容易に歩を進める事が出来る。

唐沢岳は東尾根に限らず全般的に動物の宝庫で、姿こそ未だ見た事はないが、いたる所に熊、羚羊、猿、兎等の脱糞がみられ立派な獣道が出来ている。この辺りは、ジャクナゲの原始林で、6月頃登ると花の海といった感じで見事なものである。しゃくなげの花ごしに望む不動岳、南沢岳、鳥帽子岳、三ツ岳の残雪豊かな景趣も又素晴らしい。1900m位の地点に夜露位はしのげる岩小屋がある。こゝから上は獣道も途切れ、ひどいブッシュに悩まされる。そして又再びブッシュが少なくなると今度は

150mの岩壁を持つ2060mのピークが待ち受ける。この辺から上部は7月12、13の両日、東尾根から頂上を初登攀した会員の報告を読んでいたよきたい。

『(前略)B沢の壁(B沢コルより頭まで150m)をコンテニユアスを混え3ピッチ1時間30分で登り、以後ヤセ尾根と登降が多いため、そのままコンテニユアスで登り、2200mの地点にて雨のためビヴァークをする。13日、ビヴァーク地点のすぐ上の草つきの急斜面をスタッカットで2ピッチで登る。これより先北尾根とのジャンクションまではハイマツのひどいブッシュになやまされたが7時10分頂上に至つた。(後略)』

② 北尾根 唐沢岳から北々西、不動岳の方向に向つて延びている尾根で、1900mの地点で左右に尾根が岐れている。頂上から見ると丁度Yの字の形をしている。これも前記東尾根と同様で下部は取付く事が難しい。山の神の上流と、ヨタ沢E沢側から非常に苦勞して登つてみたら、尾根は天然の粗林で思つたよりも歩き易い。こゝも又ジャクナゲの天然林である。三ツ岳の遠望が良い等東尾根に良く似ている。東尾根とのジャンクションの手前のコルに池がある。わき水らしく獣道がついている。名づけて唐沢の田圃。

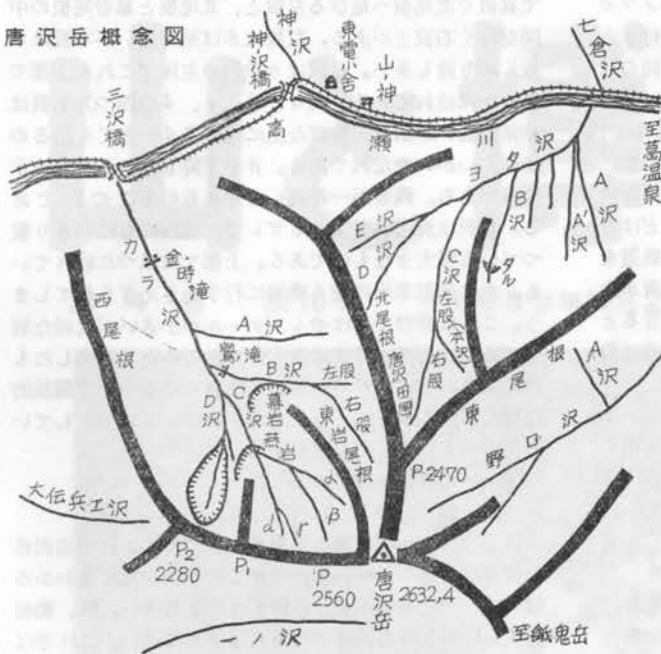
③ 西尾根 東尾根とはほぼ同等の長さをもつ尾根で、その末端は濁の対岸に延びている。下部は未だ未偵察であるが前記二尾根と同様であると思われる。しかし、カラ沢の大ガレ(D沢)をつめて2200mのコルに取付くと、そこから上部は最も容易な尾根である。この尾根だけは一の沢側から人の入つた跡があり(営林署の関係の人であると思われる)ナタ目も克明につけてある。この尾根からは燕岳が眼前に大きく聳え、その右手に槍ヶ岳が鋭くそり立つている。尾根も前記二尾根と違って広く良い尾根である。2600mのピークをこすと頂上は目の前である。

④ 南尾根 餓鬼岳と唐沢岳を結ぶ縦走路であるが、縦走路とはいつても餓鬼岳からわざわざ唐沢岳まで足を延ばす登山者は少なく、路らしい路はついておらず、距離も比較的最長のため、悪天候で視界がよくきかない時などは迷う危険がある。我々は唐沢岳の北面に重点を置いているためにこの尾根は研究不十分である。

⑤ 幕岩尾根 前記四大尾根から派生している短かい尾根の中で最も特色のあるのがこの幕岩尾根である。これは西尾根の頂上直下から北尾根に並行している短かい尾根で、この尾根を幕岩尾根と命名したのは、下部即ち、カラ沢B沢右岸に高さ200m、長さ1000mにもおおよそ殆ど垂直の岩壁があるからだ。唐沢岳の岩質は一般的に花崗岩の風化したもの、しかも逆層のものが多いがここの岩壁は固く、水でつるつるにみがかれた見事なものである。上部については、再び会員の報告をみていたよきたい。

『(前略)B沢を入り二俣より我々の行動にうつる。まず合からすく滝にぶつかり、三ピッチをコンテニユアスを混えて一の滝の上部に出るとまたオーバーハングの滝があり、数ピッチ右へトラバースして右手の尾根に

唐沢岳概念図



出る。こゝがいわゆる幕岩の上部尾根である。(中略) 尾根はよく繁つたコマツガ、モミである。午後2時頃下降のほどさを考えビヴァークを覚悟で登る。(中略) 4時半C沢に派生する尾根とのジャンクションに出る。

餓鬼の翹ぶりを思わせるヤセ尾根にハイマツの連続である。6時行動を打ち切りハイマツの陰にビヴァークする。(中略) 8月17日、5時15分出発。左右に北尾根、西尾根を仰ぎつゝ相かわらズコンテニニアスで尾根を通し、あるいは尾根を捲きながら7時15分頂上に立つことが出来た。(後略)』

四 唐沢岳の沢

① 野口沢 葛温泉の西を流れる滝の沢の支流で、その人口は滝の沢を溯ること1時間位の右岸にある。出合いには巨大な石がデンと居坐り、兩岸からは木が覆いかぶさっているため気を付けて行かぬと見落す事がある。しかし、一旦中へ入ると水量も多く、沢巾も狭くない。この沢は始めから、さして高いものはないが滝が多く、高捲きをするにしても滝登りをするにしても非常に時間を喰う。一時間半程溯つて我々はA沢へ入つたので、そこから上は未偵察である。しかし、頂上から観察したところでは、上部で二つに岐れ、相当広くなつて頂上直下までのびているようである。この沢だけは10月中にもう一度偵察してみる予定である。

A沢は狭い、急な沢でいきなり30mの滝にぶつかり高捲きをするのに1時間を要した。その上部は巨大な岩石や、春先きの雪崩でひねり倒された直径1m以上もある倒木のごろごろする間をよじ登る。水は殆どない。稜線直下は草付きであるが、三本爪又は四本爪のアイゼンでも着用して登りたいほどの悪場である。

② ヨタ沢 七倉を一寸出たところで高瀬川左岸にみ

える大きなデルタがその出合であるが、そこまで達するのに一寸厄介だ。春から秋にかけての間は高瀬川を渡渉する事が出来ないのだから、索道を利用しなければならない。索道は電力会社が送電塔の見廻りのために架設したもので、2本ないし3本の太い鉄線を岸から岸へ張つてあり、下の鉄線に足をのせ、上の一本ないし二本の鉄線を手で持つて横へずつて行くものである。上下動、前後動がはげしいため慣れぬうちはいやなものである。特に足下を激流が音をたてて流れている出水時においては。索道を渡り終ると送電塔伝いに路がついているので出合までは難なく出る事が出来る。一旦沢へ入つてみるとその複雑な事に驚く。二三回入つても全体をつかむ事が難しい。不可解な沢である。我々が命名しただけでもA、B、C、D、E沢とありA¹沢などというまででてくる。その他にも小さな沢が幾つもあり、又各沢が上部で幾つかに岐れており、その一つ一つを見究めるには相当数の日数と人員の動員を要する。

唐沢岳に関する限り、地理調査所発行の五万分の一の地図は誤りが多いが、特にヨタ沢に関してはあてにならない。

この沢は他の沢に比し、非常に暗い陰鬱な感じの沢で、岩質は風化した花崗岩で浮石が多く危険な箇所が多い。幸い大事に至らなかつたが頭と足へ落石を受けて二人の負傷者を出してしまつた。又滝の多い事も他の沢以上で沢が狭く急なために鉄砲水や雪崩が発生したらとても逃げる事は出来ないだろう。敏捷な動物として知られている羚羊でさえ逃げきれずに雪崩の下敷となつたものが、六月頃行くと見られるほどである。

前記六つの沢のうちA、A¹、Bの三つの沢は東尾根へ、C沢は頂上直下へ、そしてD、E沢は北尾根へ通じている。

A A¹沢は水量も少なく、落石、浮石に注意すればあまり苦勞する所はない。B沢は溯ること1時間半位の地点にタル状の壁があり、これが最大の難関で、第一回目の偵察では時間と、三ツ道具の準備がなかつたため突破する事が出来ずに引返している。その後は未偵察である。C沢はヨタ沢の主流と思われる。水量も多く、沢も一番立派である。出合から30分位は20mの滝が1本あるのみで比較的楽に登れるが、標高1380mの地点で沢は二つに岐れる。左が主流でこれは水量も多く、廊下状の滝の連続で、更に悪い事に日蔭であるためコケがむして非常に難しい沢だ。右もまた左股に劣らぬ悪い沢で北尾根乗越まで標高差約300mを登るのに、本会で最も優秀な会員二人で3時間近くかゝつている。最初の80m位は廊下状で滝の連続であり、続く60m位は傾斜70度位で浮石が多いうゑにコケがむして危険この上もなしである。それから又100mが階段状である。滝は殆ど垂

直に落ち、滝の上の平らな部分はシヤクナゲ、コマツガのひどいブッシュである。そして最後の40mが草付きとなりホツと一息入れて乗越に出る。D沢はやはり滝の連続する狭い沢であるが、あまり難かしい沢ではない。E沢は前記の沢と異なり、砂崩で水はほとんどない。しかし、傾斜が急であるためずらずと滑つて登りにくい沢だ。

③ **カラ沢** 前記二つの沢に比し、最も広く傾斜もゆるやかで明るい感じの沢である。特に雨上がりなどは青葉が目映えて清々しい感じさえる。七倉から軌道を歩む事2時間、三の沢橋を渡らずに左手へ入った所が出合である。小さな滝を二つ高捲いて一時間近く登ると右手に高さ50m位の立派な滝がある。唐沢岳には滝は数えきれぬ程沢山あるがこの滝程立派なものはない。カラ沢へは女性も相当大勢入ったがこの辺まで来ると顔が上気して真赤になる所から金時滝と命名した。熊でも出てきそうな感じもし、けだし名命名であろう。沢は右に折れているが、正面の大きなガレを登ると滝の上に出る。そこから1時間でA沢更に15分も行くとB沢、そして又5分も行くとC沢とD沢に岐れている。

A沢は未偵察であるがD沢を登るとよく観察出来る。水は全然なく、上部はガレで北尾根の中腹に出る。B沢は前記幕岩と北尾根から派生する尾根との間にあるルンゼ状の沢である。この沢へ入るには30m程の丁度驚の顔に似た滝(驚滝)を登らねばならぬ。上部はやはりガレ

で真直ぐ北尾根へ延びる左股と、北尾根と幕岩尾根の間を行く右股とがある。左股は水は殆どないが右股は水量もあり滝も多い。C沢はカラ沢の主流でこれも上部で幾つかに岐れている。(α、β、γ、δの四つ)岩質は非常に固いが水量が豊富な上に滝が多く、とても滑るので面白いがいやな沢である。βを下降したのみで他は未偵察である。残雪が一番遅くまであるのもこの沢である。D沢は沢というよりもガレで、地図にもはつきり載っている程大きなものである。上部では二つに岐れている。左は前記幕岩に続く燕岩に行手をさえぎられてしまう。これは幕岩よりはヤムスケールが小さいが立派な岩壁である。岩燕が非常に多くいるところから命名したものである。右は巾が50m位あり傾斜もゆるやかで開放的な感じがするが、水が全然なく、巨石がゴロゴロしているのみで暑い盛りには閉口する。

④ 一の沢未偵察

五 結 び

以上で大まかではあるが整理し終つた。これで唐沢岳の概要は大体つかめたが、今までの報告を見てもわかる様に、未偵察、観察不十分の所がまだまだ多い。又、動植物或いは鉱物等自然科学の資料は皆無に近い。これ等は今後の調査研究に待つべきであるが、これ等を総合して、唐沢岳の全貌を明らかにするには数年かゝるであろう。

(文中名称は仮称である) (大町山の会々員)



この夏、姫川水源地でのオオヨシキリの調査に出かけた時オオヨシキリよりも小型のもつと小声で囀るコヨシキリが2~3つがい、いるのを発見して、その巣がしに懸命になつたことがあつた。その鳥に秋も深まつた今、この川端のススキの中で出会うとは、まつたく思いもよらなかつた。昨年の5月の調査の時も確かに一羽オオヨシキリよりも小さい姿の鳥がいたが何んであるか、はつきりしなかつた。たぶんコヨシキリだろうというこ

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

とにしていたが本年の調査の時には、たまたま目撃することができた。それはオオヨシキリよりも少し乾燥性の所に棲み、付近の草よりも一段と高い草丈の頂を見つけてはそれにとまりしきりと囀っていた。その声はオオヨシキリよりも小声で複雑だつた。そしてとまって囀っている下の葉は糞で白くなり、いつもそこで鳴いていることを証明していた。人が近づくはずばやく草叢の中に姿を消し、又現われる。こんなことを二、三度くりかえすと又一番はじめにとまつていた草の頂に戻つて来る。半日近くも観察して、他に2~3つがいることを確認した。あれから5カ月、今雛とも共の姿を見るときとなつかしい、そしてこれからの旅が無事であるようにと……

株式会社 高山理化学器械店

松本市大名町七二

電話松本 { 1 3 1 6 / 4 0 8 4 }

文化祭準備につき10月31日まで休館させていただきます。(大町山岳博物館)

山と博物館 第4巻第10号 1959年10月25日発行

発行所 長野県大町市 TEL(大町) 211
大町山岳博物館

印刷所 長野市岡田町 176

第一法規出版株式会社